

## 審査結果の要旨

氏名：西本晃二（にしもと こうじ）

本論文は、初代三遊亭円朝作とされてきた落語「死神」の原話を解明し、いつ、どのようにして日本に受容されたかを解明したものであるが、源泉の解明にとどまらず、さまざまな世界の文化のなかで、「死神」ないし「死」がどのように観念されているかを踏まえて、そこに外部から新たな要素がもたらされた場合に、これをいかに受容し、消化し、その国独自のものとするかをも考察し、わが国文芸の基層的な「民衆文化」の次元で、意識下の文芸的感性としてそれらを育ててきた「話芸」の研究に、新たな光を投じたものである。

従来、落語「死神」は、明治中期にイタリア・オペラの『靴直しのクリスピーノ』からヒントを得て円朝が創作したと言われてきたが、実態は必ずしも明らかではなかった。西本氏は、これは一八五〇年初演の『クリスピーノと代母（コマル）』であることを確認し、明治一九年、河竹黙阿弥作の歌舞伎『加賀鳶』初演を落語「死神」成立時期の上限とする一方、「死神」の最も早い記録が登場する明治三十年を成立の下限とする。こうして落語「死神」の成立時期が明治二十年代と確定された。また、話のタネを円朝に伝えた人物として、従来から本命視されてきた福地桜痴と條野探菊について詳細に追跡し、福地桜痴が慶応元年（一八六五）の遣欧使節団の通訳として随行した際、パリ滞在中に、「帝室イタリア劇場（ル・テートル・アン・ペリアル・イタリヤン）で上演された『クリスピーノと代母（コマル）』を観劇した可能性が極めて高いことを確かめ、これを帰国後に円朝に語ったのが元であることを突き止める。

西本氏はイタリア、フランスを初めとするヨーロッパ諸文化についての該博な知識と、徹底的な探求とによって、落語「死神」の源流となったヨーロッパの「死神」譚に、イタリア・オペラ系統の南ヨーロッパ型と、グリム童話系統の北ヨーロッパ型の二系統が存在することを明らかにする。抽出された特徴を幾つか例示すると、①北ヨーロッパ型であるゲルマン語系の地域では、死神が男性であるのに対して、南ヨーロッパ型ラテン系の言葉が話される地域では死神が女性である。②社会的正義と公平を象徴的な形で主張する傾向は北の系統に著しい。③北では宗教色がはっきりしているが、南では世俗性が強く、キリスト教の影が薄い。④北では主人公が死神との約束を破る理由がロマンティックな「恋」になるが、南では金や危険といった実際的な理由で働くことが多く、恋はあっても傍筋に置かれる。⑤南の死神譚では「靴」が重要なモチーフであるが、北のグリム童話では、靴はまったく出てこない、等々である。なお、南北の中間地帯であるフランスにおいては、南北両方の型が見られるという。

イタリア・オペラの主人公「クリスピーノ」は靴屋であるが、古代の殉教した聖人で、中世以降、靴屋同業組合の守護聖人となった「聖クリスピーノ」に基づくことが示され、絵画・演劇からワーグナーの『ニュールンベルグのマイスタージンガー』その他の、靴屋と死神をめぐるさまざまな文化的変容が辿られるなど、比較文化的な探索はヨーロッパを縦横に駆けめぐる。

死神譚を構成する諸要素は、話が持ち込まれた土地の風土・習慣・伝統などのいわゆる「文化」によって土地に応じた味付けを与えられて、独自の死神譚が成立すると言う。落語の「死神」における日本独自の変容についても詳細に指摘されている。

以上、本論文は、従来あまり探求の手がつけられなかった「話芸」の研究において、画期的な成果を収めたものであり、本審査委員会は、博士（文学）の学位に相応しいものと結論した。